

坪之介全集 3

講談社

吉行淳之介全集 3

昭和四十六年十二月二十日 第一刷発行
昭和五十年六月二十八日 第三刷発行

著 者 吉行淳之介

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二一 郵便番号一二二
電話東京(〇三) 九四五一一二二 (大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価は箱に表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

© 吉行淳之介 一九七一



目次

闇のなかの祝祭

*

西瓜を持つ女

室内

赤い歳月

7

72

78

98

〈解説〉福田宏年	日記	*	随筆	*
			〈75編〉	

374

343

127

装幀 前川 直

吉行淳之介全集

3

闇のなかの祝祭

一

赤児の泣き声が、熄まない。狭い家である。その泣き声を理由にしよう、と沼田沼一郎はおもった。

「うるさくて、原稿が書けない。ちょっと散歩してくる」

妻の草子は、黙って見送った。はっきりした目的をもつて出かけてゆく充実した線が自分の背中に現われていることを感じ、その背中に貼り付いてくる妻の視線を感じ、彼はうしろめたい心持になった。長い年月、彼の姿勢にこのような充実の気配は、現われたことがなかった。それは、妻の眼から隠さねばならぬもののようにおもえた。

繁華街に出て、彼は目的の映画館に入った。片隅の空

席を探し、暗い中で身を潜めるように椅子に腰かけた。しかし、すぐに背を真直ぐに伸ばし、彼はスクリーンの画面と対い合った。

やがて、画面一ぱいに都奈々子の顔が写し出された。大写しになった顔の二つの眼が濡れたように光り、やや厚手の二枚の唇が微かに動き、さきやく声が出てきた。「好きよ」

白と黒と灰色の色調のその顔を、探りたい、うしろめたい、そのくせ満足した心持で、彼は見詰めていた。

奈々子が、その場面の自分の表情を見逃さないでほしい、とあらかじめ彼に言っていたのだ。

「あなたのことで頭の中をいっぱいにしておいて、好きよ、というセリフを言うわ」

その言葉を思い浮べ、暗い中で彼はこみ上げてくる喜びを抑えようとした。それは、抑え切れそうにもなかった。そう分ると、彼は精一ぱい歯を剥き出し、顔一面を皺だらけにして大袈裟な笑い顔を作ってみた。その人工的な笑い顔の隙間から、ゆっくりと喜ばしさを発散させた。

映画が終り、館内が明るくなると、彼は顔を伏せ密会

の帰りの男の姿勢で、廊下へ出た。廊下の隅に、早撮り写真のボックスがあった。彼は思い付いて、そのボックスに入った。自動車の運転免許証を手に入れるためには、小型の顔写真が必要なのだ。

沼田沼一郎は収入の少ない作家であり、また、自家用車の必要を感じたことは無かった。しかし、都奈々子と知り合って、一年半ほど経ってから、その必要を感じはじめた。人目を避けることが必要となったのだ。丁度、多額の報酬が約束される週刊誌の連載の仕事がはじまったので、中古自動車を手に入れる見透しができていた。

廊下で三分間待つと、同一の顔写真が四枚でき上った。彼は印画紙の上の自分の顔を見て、友人の松木陽吉の言葉を思い浮べた。

「ふしぎなものだね、おまえの顔が変わってしまったよ。甘いムードが出てきた。ところどころけそうな感じが出てきた」

それは揶揄する調子だったが、不思議な現象に出遭って驚いている調子もこめられていた。恋愛にたいしてシニクな姿勢を取りつづけてきた男が、突然、一人の女

性に魂を奪われてしまった様子が、松木の眼に映っているのである。

その言葉を思い出して、彼は印画紙の自分の顔を換べた。しかし、彼自身にはその変化は判別できなかった。

映画館の外へ出た。街角のバチンコ屋の傍を通り過ぎるとき、店内からレコードの歌声が流れ出てきた。

——泣かないで、泣かないで、あしたの晩も、会えるじゃないか。

甘ったるく、感情をこめた、男の裏声である。いままでの彼なら、皮肉な笑いを浮べ、あるいは嘔気をもよおした顔つきを作って、

「へっ」

と笑い捨てる筈の歌声である。

その歌声が、心に沁みてきた。一瞬、彼は狼狽したが、すぐに無防備に心を開けひろげて、その歌声を迎え入れた。

彼の脳裏に、奈々子の顔が浮び上って、さきやいた。

「好きよ」

それは、画面の顔ではなく、彼と対い合ったときの彼女の眼は、みるみる涙で一ぱいになる。

その眼を見て、彼も言う。

「好きだよ」

すると、彼は自分の眼にも涙が滲み出たことを知る。

そういう自分を彼は許し、涙は出るに委せようとする。

これまでに、女の前で涙を見せたことはない。男の涙は女を感動させる筈だ、とおもう。

眼から溢れ出るほど涙を出してみよう、と考えた瞬間、彼の眼は乾きはじめる。奈々子の眼は、すぐに涙で一ぱいになる。スクリーンに写し出された涙も本ものであろうし、舞台の上でも、彼女の眼からは本ものの涙が流れ出た。

彼は、奈々子の涙を好ましくおもう、同時に、持て余しもした。奈々子の涙について、彼はしばしば考えをめぐらせた。感情が昂ると、彼女の涙腺は刺激されて、ただちに涙が流れ出てくる。そして、奈々子の感情は、きわめて安易に、昂る。

時としては、人間の感情というものにたいして無礼だとおもわれるほど、容易に昂るのだ。

「だから、奈々子の涙は本ものともいえるし、同時に贋ものともいえる」

街を歩いている彼はその考えを思い出し、奈々子の大型な身振りをふと疎ましくおもう。しかし、彼の脳裏にはすぐに、その疎ましさを押し除けようとするかのようになり、一つの場面が浮んできた。

奈々子の部屋で、彼はテレビを覗いていた。ボクシングの中継で、画面では二人の男の逞しい軀が、軽快なフットワークを示して、動きまわっていた。

「拳闘は、好き？」

「あまり好きじゃないわ。怖いんだもの」

タンスを背にして坐っている奈々子が、答えた。

そのうち、彼は奈々子の顔を横目で窺いはじめた。一方の選手の拳が相手の顔を、顎を、胴体を捉える度に、彼女の顔が歪むことに気付いたからだ。その両眼が閉じて下唇が突き出たり、片眼が細くなって片方の唇の端が釣上ったり、さまざまの変化を絶え間なく示す。彼が見ていることに、奈々子は気付いていない。

やがて、一方の選手のアップバートが烈しく相手の顎を捉えた。グローブの皮が皮膚に衝き当る音が響いた瞬間、奈々子の顔がくっとうしろへ引かれ、背筋が伸び、腰が豈から大きく離れた。そして、奈々子の後頭部

が、タンスのかなり上の金具に衝き当って音を登した。

彼は、笑い出した。

奈々子は、片手の掌で後頭部を覆い、下唇を突き出して顔をしかめていた。痛さのために、しばらく声が出ず、ようやく口を開いた。

「見てたの、いじわるねえ」

街を歩いてゐる沼田は、結局は奈々子のそういう顔に行き当り、

「好きだ」

と、声に出して呟くと、帰途についた。

彼の家は都心部にあった。コンクリートで舗装された地面の間に、取残されたように黒い土のむき出しになった地面があり、その地面に生えている樹木や雑草の奥に小さい木造家屋が建っている。

玄関の脇の藤棚は、朽ちて崩れかかっていた。十年前、その家が建つと同時に、彼は草子と一緒に暮らしはじめたのだ。

玄関の戸に手をかけたとき、薄闇の中に甘ったるい花の匂いが漂っているのに気付いた。藤棚の下に、沈丁花が植わっている。彼は鼻腔をふくらませて、その匂いを

早春の気配と一緒に胸の奥深く吸い込んだ。そして、ふたたび彼は自分の姿勢に空虚の気配を感じるのだ。

しかし、その変化に妻の草子ほどの程度気付いているだろうか。どのような解釈を、奈々子と彼の関係にくだしているのだろうか。これまでに幾度も心に浮んだその疑問に、またしても彼は行き当った。

一ヵ月前のことである。赤児が生れた数日後、奈々子が彼に言った。

「あなたの赤ちゃんの顔が見たいわ。見に行つてようかしら」

彼は返答に窮し、やがてこう言った。

「あの病院では、赤ん坊は別の部屋に離してあるから、見ることはできないよ」

彼女は重ねて言う。

「お祝に行かなくていいのかしら」

「かまわないさ。やめておいた方がいい」

「でも、お祝に行かないと、変だとおもわれはしないかしら」

奈々子は二、三度、彼の家へ訪れてきたことがあるので、草子とは顔見知りの間柄なのだ。

「それも、そうだが……」

「そうでしょう。辛いけど、やっぱりあたし行くわ」

その翌日、彼が病院へ行くと、草子が言った。

「奈々子さんが、お見舞にきてくれたわ。お祝いを貰ったわ、赤ちゃんの毛布よ」

彼は妻の顔を眺めた。しかし、そのときにも、判断は付かなかった。

産後の健康状態がおもわしくなくて、草子は一ヵ月近く病院にいた。そして、数日前、赤児と一緒に家に帰ってきた。赤児は、奈々子が祝いに贈った毛布に包まれて、草子の腕に抱かれていたのだ。

その疑問を心の底に蟠らせたまま、彼は玄關の戸を開いた。その音はかなりの大きさに響いたが、人間の動く気配は無かった。家の中に入り、自分の部屋の襖を開いたとき、おもわず彼は立竦んだ。

彼の机の前に、草子が坐っていた。その両肩の筋肉が、衣服の下で願張っている気配があった。両方の掌は、机の面に貼り付いたようになっており、その姿勢のまま首だけまわして、草子は彼の方を見た。周囲に、黒い破片が散乱している。それがなにか、すぐに分った。

奈々子が歌を吹き込んだLPレコードの破片である。

奈々子の顔写真の印刷してあるジャケットが二つに引裂かれて、屑籠に投げ込まれてあった。

「ひどいことをするじゃないか」

「ひどいのは、あなたじゃないの」

傷ましい気持で、彼は畳の上を眺めた。黒い破片の一つをつまみ上げて、指先に力を籠め、二つに折ろうとした。しかし、その破片は撓るばかりで、折れはしない。あらためて、彼は散乱している沢山の破片を眺めまわした。そして、一枚の黒いプラスチック製レコードが、これだけの破片に変るために費やされたおびただしいエネルギーに考えを向けた。そのエネルギーが煙のように濛濛と室内に立ち籠めてでもいるかのように、彼は周囲の壁から天井へと視線を巡らせた。

「どうしたんだ？」

なぜ、不意に彼女の怒りが爆発したのか、分らなかった。

「なにか聞いたのか」

草子の唇がひくひくと動き、烈しい言葉が出てきた。「知っていたわよ。いろんななおいを、いっぱい付けて

帰ってきていたじゃないの。知らないわけはないでしょう」

「それなら、なぜ……」

「なぜ、とは、なんですか。いままで我慢していたのが、我慢し切れなくなっただけよ」

「なにか聞いたんだな」

「電話で教えてくれた人があったわ。でも、べつに新しいことを聞いたわけじゃないわ」

「それは、誰だ」

「誰だって、いいじゃないの」

しばらく沈黙があった。

にわかに、草子が甲高い調子で言った。

「どうせ、わたしは何にもできない女よ」

「きみに特別のことができるのを望んだことは、一度も無いよ」

「それはそうだけど、わたしが何かしようとする、いつも頭から圧え付けて、できなくさせてしまうじゃないの」

「そんなことはない。きみがやりたいといったことを留めたことは一度もない。きみがいろいろのことをやりか

けては、結局やめてしまっただけだ」

「でも、あなたと一緒にいると、手も足も出なくなるのよ。わたしの青春は、そのために滅茶滅茶になってしまったわ」

その言葉は、彼女の口癖になっている。

そして、その言葉にも一理はある、と現在の彼はおもう。年少で結婚したため、彼の気持に余裕がなかった。

他人と一緒に生活してゆくことは、絶え間ない個性と個性とのたたかいだと思つて暮した時期があった。喰うか喰われるかのたたかいである。

「しかし、本当の才能というものは、どんなに圧え付けられたつて現われ出てくるものだ。他人の手で、芽を摘み取られるものではないさ。それに、繰返して言うが、特別のことができることを、ぼくは望んだことはないんだぜ」

苛立たしい気持でそう言つた彼は、一年前に草子が自動車運転免許を取つた頃のことを思い出した。

「これで、ようやくあなたにできないことが一つできるようになったわ」

しばしば、彼女はその言葉を口に出した。その口調に

は、媚は感じられず、むしろ復讐に似た気持を満足させていると考えた方がよさそうだ。しかし、彼にはできない自動車の運転ができるようになった、という他愛もないことを繰返し強調する彼女の気持には、彼の理解の及ばぬところがあった。

また、しばらく沈黙がつづき、やがて草子の押し殺したような声が聞えた。

「だけど、どうしてあんな厭な女に、選りに選ってあんな女に手を出したの」

「手を出したわけじゃない」

「じゃ、どうしたのですか」

「惚れたんだ」

その瞬間、天井から糸で釣り上げられたように、ふわりと草子は立上った。そして重心を失った恰好で歩き出した。方向を定めず歩きはじめた彼女の正面に、窓があった。

彼はいそいで立上り、草子の両肩を押えた。

「できる、できるわ。わたしだって、できる」

そういう言葉が、草子の唇から洩れ、彼女の眼が焦点を失って硝子玉になった。

彼の胸に、草子の軀が背中から倒れかかり、硬直して一本の棒となった。彼はその軀を抱きかかえ、畳の上に横たえた。

仰向けになった彼女の顔の二つの眼は、依然として二つの硝子玉のように見開かれたままだ。その眼の傍で、彼は掌をひらひらと振ってみた。しかし、その眼はすこしも動かない。掌を彼女の鼻の下に近付けた。指の皮膚に、かすかな息が触れてきた。

彼は、魂が脱け出してしまっている草子の顔を睨んだ。

「この女の傍にくっついて、脱け出して行った魂が戻ってくるのを待たなくてはならないのか。いや、それはもう羽搏いて、どこか遠くの方へ飛んで行ってしまった。自分がくっついて世話しなくてはならないのは、その部分が空洞になった軀なのだ」

不安と怒りが、心に渦巻いて、彼は極度に緊張していた。

傍の草子の顔に、彼は視線を当てた。いまでは目蓋が垂れ下って、眼球を覆っていた。

その目蓋が上って眼球が現われてくるとき、それは依

然として硝子玉のままであるか。あるいは、精神の働きを示す光を宿しているか。

追いつめられた気持のまま、長い時間が過ぎた。ようやく草子の目蓋が上り、正常な光を宿している眼が現われた。その眼を見てしまうと、それが当然とおもえてくる。硝子の目玉になってしまうことなど、ある筈はなかった、とおもえてくるのだ。

二

夜、草子が彼の部屋に入ってきて机の横に坐った。手に持っていた彼の茶色のスポーツシャツを膝の上に置き、ベンジンを染ませた綿でシャツの肩のあたりを拭きはじめた。

そして、呟くように言った。

「また、こんなものを付けてきて。この泥みたいな化粧品は、なかなか落ちなくて困ってしまう」

シャツの左肩の部分が、赤褐色に染まっているのに、彼ははじめて気付いた。奈々子が傍に坐り、頬を彼の肩に押し付けてくる姿勢を、彼は鮮やかに思い浮べた。

そう言ったきり口を噤んだが、草子は部屋を出ようと

しない。

机の上の電話機のベルが鳴った。

「もしもし、奈々子よ」

受話器の中で、ためらいがちの彼女の声がした。

「いま、何をしているの？」

「べつに……」

「あたしのこと、好き？」

「ええ」

奈々子の声が、急に変った。

「誰かそこにいるのね」

「うむ、でも、かまわないよ」

「かまわないことは、ないでしょ」

「うむ、でもねえ……」

その瞬間、草子の手が伸びて、受話器を掛ける金具を押えた。電話が切れた。

「なにをする」

荒い声が、彼の口から出た。

「そんな猫撫で声を出さなくたっていいじゃないの。いやらしい」

すぐに、また電話機のベルが鳴った。草子を押し除け